

3-20. 奄美群島広域事務組合（鹿児島県徳之島）

(1) 地域の概要

奄美大島に次ぐ大きな島で、中・古生層や一部火成岩類よりなる基盤岩類がほぼ全域にわたって広く分布し、山岳としては井之川岳（645m）を主峰とする山脈が島の中央を走り、島を東西に両断している。河川の主なものに、秋利神川があり、西海岸に注いでいる。海岸線は単調であるが、沿岸にはリーフが発達している。

総面積は奄美大島の3分の1に過ぎないが、耕地面積は群島中最大で、さとうきびを主体に野菜、畜産（肉用牛）との複合経営の農業が営まれている。さとうきびの生産額は群島総生産額の48.9%を占め、また畜産も群島の44.0%を占めている。

自然は、猛毒で知られているハブや、天然記念物として保護されているアマミノクロウサギ、トクノシマトゲネズミ、オビトカゲモドキ、徳之島の固有種であるハツシマカンアオイ、トクノシマエビネなど、貴重な動植物が多く生息している。

【平成25年度奄美群島の概況より抜粋】

(2) アドバイザー派遣申請の背景

近い将来奄美群島のキラークンテンツとなるエコツーリズム推進を図っている中で、「奄美群島エコツーリズム推進協議会」や「エコツアーガイド連絡協議会」等の組織体制が整いつつあり、奄美群島エコツーリズム推進全体構想の策定が進められている。また、増大が予想される観光客に対応するため、エコツアーガイド育成事業の創設や、観光客の満足度向上及びエコツアーガイドの社会的地位の確立を目的に認定制度の体系化を図る。

一方、エコツーリズムに直接関わるキーパーソンには、エコツーリズムの概念などが共有されているが、地域全体へ共有することが見落とされ、個の経済的利益に偏り、「自然環境保全」「観光振興」「地域振興」のバランスが保てなくなることが懸念される。

事業導入により、地域の思いを形にするという観点からエコツーリズムを捉え、地域全体で共有する。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 12 月 27 日 (土)
場	所	鹿児島県徳之島 (天城町役場 4 階会議室 (ゆいの里ホール))
アドバイザー		海津 ゆりえ氏 (文教大学 国際学部 国際観光学科)
参加者		<p><基調講演／パネルディスカッション参加者></p> <p>【総合司会】 奄美群島広域事務組合 主査 竹原 祐樹</p> <p>【基調講演】 文教大学 国際学部 国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏</p> <p>【徳之島エコツアー紹介】 徳之島エコツアーガイド連絡協議会 会長 美延 睦美氏</p> <p>【パネリスト】 文教大学 国際学部 国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏 徳之島エコツーリズム推進協議会 会長 丸野 清氏 NPO 法人徳之島虹の会 事務局長 美延 睦美氏 民泊「幸ちゃん家」女将 竹田 初枝氏 長崎県立大学 経済学部 地域政策学科 教授 西村 千尋氏</p> <p>【聴講者】 徳之島自然保護官事務所、大島支庁徳之島事務所、徳之島町役場、天城町長、天城町役場、伊仙町長、伊仙町役場、徳之島エコツーリズム推進協議会、徳之島エコツアーガイド連絡協議会、徳之島観光連盟、NPO 法人徳之島虹の会、NPO 法人いせ 1・1、文教大学学生、地域住民など 計 80 名程度</p>
スケジュール・方法		<p>わきゃシマから始めよう！エコツーリズム</p> <p>○基調講演『地域が創るエコツーリズム』(30分)</p> <p>○徳之島エコツアー紹介 (15分)</p> <p>○パネルディスカッション『エコツーリズムでシマ興し』(50分)</p> <p>○シマ遊び (120分)</p>

(4) アドバイスの内容

1) 基調講演 ～地域が創るエコツーリズム～

エコツーリズム推進地域の取組状況を知り、いたるところでエコツーリズム推進に向けて頑張っている地域や人がいることを実感する。また、エコツーリズムに関心を持ち、各自がエコツーリズムと何らかの関わりを持っていることに気づき、身近なことから取り組もうという意識を持つ。

海津氏が関わっている日本各地のエコツーリズム推進地域（埼玉県飯能市・沖縄県西表島・東京都小笠原村・福島県裏磐梯等）での事例をタイプ毎（専門知識型・生活文化型・アウトドア型・遊び型）にわかりやすく講演頂いた。中でも参考になった埼玉県飯能市の『白子五人衆』のエコツーリズムの捉えた方について以下に記す。

【エコツーリズムとは...】

- ・ありのままの地域を伝えること
 - 誰もが語り部、ガイドになれる
 - 地域を再認識し誇りをもてる（幸せ！）
 - 来訪者は交流や出会いの喜び（幸せ！）
- ・来訪者に満足していただき、地域のファンになってもらい、また来てもらう。そして定住へ
- ・住む人が地域を選ぶ時代

徳之島の可能性

- 当たり前前の日常にある宝、生活風景の中にある固有の文化、伝えようとする人々の存在も宝（名人）であり、世界自然遺産も「わきゃシマ」の宝である。
- 人が手を使って繋いできた“宝”を現代の人が手を使って後世に繋いでいく『手の文化』として表現できる。シマの中で世代を超え宝探しをすることで、ガイドになるならないは別として地域を伝えていく、文化の力を取り戻すことができる。



親睦のためのお茶「ふり茶」



昔ながらの黒砂糖作り



徳之島の日常「闘牛散歩」

2) 徳之島エコツアー紹介 ～あなたも明日からエコツアーガイド～

壮大な自然、受け継がれる伝統文化、人情豊かな島んちゅ、不思議なエネルギー（元気の素）がエコツーリズムの基本である。身のまわりにちょっと目を向けるとエコツーリズムの素材はたくさんある。要はやる気であって、やり方は簡単。得意なワザを自慢することと、大好きなシマを伝える事。

3) パネルディスカッション ～エコツーリズムで地域興し～

徳之島におけるエコツーリズムの次なる一步を参加者全員で共有し、シマ一体となってエコツーリズムに取り組む契機とする。

①丸野 清氏

➤徳之島エコツーリズムを、島内外への発信するため2テーマを掲げている。

i. 濃縮還（環・歓）元！徳之島～必ず見つかるアナタの探しモノ～奄美群島独り占め！

奄美群島のあらゆる魅力が凝縮されたシマの宝を、地域の環により大切に守るとともに、上手に楽しみながら活かしていくことで、来訪者には歓びを提供し、その利益を地域へ還元することで、次の世代へと引き継いでいく。

ii. 私たち「オトナ」は、シマでの昔の遊び方を伝えます。～アソビはマナビ～

昔の人々は遊びやその準備を通じて自然と触れ合うことで、生きる知恵を得てきたと言え、昔の遊びを見つめなおすことで、自然と密接に関わってきたシマの生活や文化を学ぶことができる。

➤数十年前から始まった奄美ミュージアム構想策定の中で、シマの宝探しをしてきたが、その宝をどう観光と結び付けていくのか、結び付けるのは人なので人材育成が重要だと思う。

②美延 睦美氏

➤2011年に青少年健全育成と自然保護活動を目的に有志らでNPO法人徳之島虹の会を発足させたが、その活動が結果エコツーリズムと繋がっている。シマの事を知ることが人に伝える事に繋がり、それが行動へと繋がる。1人でやるには相当なエネルギーが必要だがシマ全体で取り組むことが重要だと思う。

➤現在は、こちら側からの発信で様々な活動をしているが、逆に皆さんから声を掛けて頂きたい。その活動を企画（下準備）することに大切なものがあり、エコツーリズムの推進力につながると思う。

③竹田 初枝氏

➤体験型の民泊が増えて欲しい。島内に民泊が10軒あれば修学旅行で、1軒5人受け入れたら50人が来島することになる。修学旅行は継続するので島の活性化につながり、次世代につながるのではないかと思う。

➤町有地に図書館を作りたい。子育てを終えた方々から本を頂いており結構な冊数

になっている。その本が子供達を心豊にし、さらには大人も豊になると思う。

④西村 千尋氏

- エコツーリズムは地域づくりであり、地域づくりは人づくりである。
- 人は気づいて、考え方が変わって行動に変えていくことをやっていかなければいけない。ライフステージとしてみれば、幼少期は直接体験学習、学童期は知識・技術を得るための学習、大人は参加行動のための学習となる。その中で、大人が地域の子供達をどう巻き込んでいくのか、学校教育との結びつきや地域の企業とのリンク等の繋がりが大切。

4) 質疑応答

Q. 奄美大島の瀬戸内町ではシーカヤックが定着してきているが、徳之島においても魅力を増すための体験型メニュー（シーカヤック・ロッククライミング等）の可能性は？

A. レースで観光客を呼び込むというよりは、日常からシーカヤックを楽しめる環境づくりが大事。島根県隠岐の島ではダイビングの空いた時間にシーカヤックをやっている。
また、トレッキングやシーカヤックでの癒し効果が実証されているので、ヘルスツーリズムの視点で都会から人を呼び込むことも考えられるのでは。

Q. 島出身の学生が卒論等でシマを学べる環境づくりが必要だと思うが。

A. 奄美出身の学生がゼミを超えて、自主ゼミで奄美研究会を立ち上げ卒論を書いた例もある。卒論は必ず地元でフィールドバックし、地元もデータベース化し、情報を共有・蓄積し提供できるようにしておくことが重要。

Q. 徳之島と言えば選挙戦や闘牛であまり良くないイメージが広がっていると感じるが。

A. それ以外の徳之島の姿が発信されていない事に尽きるのでは。闘牛のイメージよりは牛への愛を感じたので文化面の発信に力を入れてはどうか。また、観光客はいいメディアなので、口コミで人が来るという循環が一番強い。

A. 子供・高齢者、各世代が生き生きとしている“寿の島”であると思う。隣の島と似ているけど違うところを見つけることも大事。

Q. ガイドは100%正確なことを伝えなければならないのか。

A. 客の満足に関しては、ガイドの責任は一部である。知識が正確であることに越したことはないので、一步踏み出してほしい。また、知らない事もあると思うが、分からないことは分からないと伝え、自己研鑽の場でもあることを認識してほしい。

A. 客の質問に全て答えるのは不可能。客も同じ場所を違うガイドで行ってみたい色々感じて欲しい。あまりきっちりしすぎると楽しめない、まずガイド自身が楽しむことが大事。

Q. 行政としてもエコツーリズムに関わる方々を支援していきたいが、行政の関わりとして参考になる事例があればご教示いただきたい。

A. エコツーリズムについては、環境・歴史・文化等が関係しているので部署横断的な組織が必要。事例として、ある職員に権限を与え、しっかりと所属課の業務をこなしていればエコツーリズムに関して他課との調整役を行って、世界ジオパークに認定されている自治体もある。



シンポジウムフライヤー



基調講演



パネルディスカッション



登壇者全員集合！



まちあるき（手々集落）



まちあるき（阿権集落）



もりあるき（当部林道）

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

① 『ガイド』 にとっての効果

ガイドを始めたばかりの新米ガイドやこれから始めようとする者にとって、他地域の事例を知ることにより、地域の魅力や宝を自ら気づき、語るこそがエコツアーリズムだという自信につながった。

② 『地域住民』 にとっての効果

何もないと思っていた“わきゃシマ”に、他者がうらやむような宝があったことを知ることができ、自分たちも何らかの関わり合いがあり、何かできることがあるのではないかという意識が高まった。

③ 『観光事業者』 にとっての効果

徳之島において観光に必要な素材には（宿泊・交通・飲食・お土産）があれば十分であったが、世界自然遺産登録を見据え、様々な観光形態があることを知り、全体のコーディネーター的役割を担うことができる人材としてエコツアーリズムガイドの必要性を感じている。

④ 『行政』 にとっての効果

他地域の事例を知ることにより、それぞれの地域の特性を理解し、それぞれの

得意分野を活かして、行政はそれらをサポートしていくことが必要だと改めて感じた。また、エコツーリズムの概念に従うと、行政の中で推進体制は横断的な役割の共通が必要となってくるため、シンポジウムで得た知見は今後の世界自然遺産登録に係る業務の推進体制の構築にとって重要な視点であった。

2) 今後の期待される効果

- ・これまでの取組や、シンポジウムを通して得た知見を踏まえ、エコツアーガイドが自然と人を繋げる役割を担い、学校教育の中においては環境教育の先生として、シマの未来を担う子供達に自然の素晴らしさや関わり方を伝える事が期待される。

- ・島んちゅにとっての日常がエコツーリズムを推進する上で『宝』となる気づきがあったことで、今後、更なる宝の掘り下げや、昨年度着手したフェノロジー・カレンダーのブラッシュアップと併せ、宝を観光に活かすための一歩にもつながることが期待される。

3) 今後の取組

現在、世界自然遺産登録を見据え増加すると予想される観光客に対応するため、エコツアーガイド人材育成を実施しているが、併せて人と人を繋ぐ地域コーディネーターの更なるスキルアップを検討したい。また、地域住民の機運の醸成はもちろんのことだが、それをバックアップする体制も充実されるよう働きかけたい。加えて、奄美群島エコツーリズム推進全体構想策定にあたり住民を巻き込んだ形で完成させたい。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

(参加者からの声)

- ・島の子どもたちが自分の生まれ育った島を誇りに思えるように郷土教育に力を入れていきたいと思う。
- ・普段の生活の中にある宝に気づきみんなで楽しみ、未来に伝えるものだと感じた。
- ・島には多くの宝がねむっている。この宝を探すために地域住民にエコツーリズムを啓発していく必要があると感じた。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

文教大学 国際学部 国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

奄美群島は国立公園の指定および琉球弧世界自然遺産への登録を当面の目標に掲げ、奄美群島エコツーリズム推進協議会を2013年度に設立し、今年度からガイド養成講座を開始している。奄美群島広域事務組合を事務局とし、島間調整を行いながら12市町村で一つの全体構想を準備しているところである。

②課題

奄美群島の地理的特性・自然的特性・文化的特性は多様性にある。このことから群島全体が同じ温度差でエコツーリズムに関わっているわけではなく、理解や捉え方もそれぞれである。外に向けた「ひとつの奄美」としての発信に至っていない。島内での担い手や中間組織の育成も進んでいない。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①奄美群島全般について

離島でありながら群島である奄美群島の魅力は、地理的・自然的多様性と、それに伴う豊かな文化的多様性にある。これらの特徴は過去の歴史や人々の移動等に影響を受けたもので、今もなお薩摩や琉球文化と強いかかわりを持っている。各島々の住民の郷土愛は強く、伝え残された生活文化や言葉を集落単位で掘り起こす博物館活動等も活発である。

②徳之島（アドバイザー派遣地域）

徳之島は3つの町（伊仙町・天城町・徳之島町）から成り、長寿（日本最高齢の泉重千代さん等）と子宝（出生率2を超える）の島をうたうように、温暖で食文化豊かな島である。

ア. 自然：地質的にユニークな特徴を有し、エコツアーの主要資源としてのジオパークという位置づけができる。アマミノクロウサギが生息し保護活動が盛んである。

イ. 文化：手刈のサトウキビから絞った黒砂糖、ジャガイモやサトウキビ等の農地、闘牛と牛を育てる人々、手作りの塩（ましゅ）、伝統家庭食、ふり茶等、「手の文化」が色濃く残る。薩摩や琉球文化が景観にも残り、古い集落の街並みなども残されている。

上記の資源は島民が教えてくれたものである。島民が大切にし、価値を見出し、シマの中で伝え残していきたいと願う資源が多数あることが魅力の源となっている

3) アドバイス（講義等）の概要

徳之島にて12月27日に開催されたシンポジウム『わきゃシマから始めよう！エコツーリズム』にて、『地域が創るエコツーリズム』と題して30分の講演を行い、パネルディスカッションのコーディネートをを行った。シンポジウムは地域住民を対象としたもので、以下の疑問に答えることをミッションとした。

①エコツーリズムって何？

⇒カタカナ語への抵抗や一般の観光との違いを理解してもらうことを目的とした。

②どんなことがエコツーリズムになるの？

⇒何か特別なことをやらされるのではないか、難しいという捉え方を払拭してもらうことを目的とした。

③他地域の事例

⇒知床、西表、屋久島、小笠原などの自然豊かな地域事例、白川郷、飯能、鳥羽、飛騨等里地や里山の事例、軽井沢等リゾート地の事例を紹介した。具体的組織や団体ではなく、イメージを持ってもらうことを主眼にしており、詳細は広域事務組合に尋ねてもらうこととした。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

エコツーリズム推進協議会設立総会を2014年3月28日に開催し、全体構想のドラフトが提案された。第2回協議会総会を2015年3月25日に開催予定である。

②全体構想への意向について

作成予定で準備を進めている。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

ガイド育成事業は進められている。

組織体が大きいため、書類の整備を進めることに労力を要している。今後は、各島内での体制づくりや群島全体としての中間組織の整備が今後の課題であろうと思われる。役割は、対外的なマーケティング、プロモーション、対内的な調査やモニタリングなど、エリアマネジメントである。推進協議会は会議体なので、これらの役割を果たす実行部隊は別途設定が必要である。既存組織からの選定も可能である。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

奄美の島々には、郷土愛豊かで熱い思いを抱えた人々が住んでいる。文化への誇りや、シマの人々の結束等は他地域のどこにもないものを有している。議論が活発であることも美点である。エコツーリズムの推進に当たって重要な要素である。今後は、エコツーリズムを通して何をしたいのか、既存の観光や地域の枠組みの中で、

エコツアーリズムをどこに位置付けて行くのかを確認しながら進めていただけたらと願う。